【292】

氏　名（本籍）	武　居　　渡（東 京 都）（たけい わたる）
学 位 の 種 類	博　　士（心身障害学）
学 位 記 番 号	博　乙　第　2038　号
学位授与年月日	平成 16 年 5 月 31 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 2 項該当
審 査 研 究 科	人間総合科学研究科
学 位 論 文 題 目	**手話言語環境にある乳児の初期手話言語獲得過程に関する研究**

主　査	筑波大学教授	博士（心身障害学）	四日市　　章
副　査	筑波大学教授	学術博士	齋　藤　佐　和
副　査	筑波大学教授	保健学博士	池　田　由紀江
副　査	筑波大学助教授	博士（教育学）	茂　呂　雄　二

論 文 の 内 容 の 要 旨

（目的）

手話言語は，聾者の間で自然に獲得され，日常的に使用されている自然言語であり，音声言語とは異なる独自の文法構造を有している。近年，ろう教育の中でも手話が積極的に評価され，指導する際に使われることが増えてきたが，手話言語がどのような言語であり，どのように獲得されるのかについては明らかにされてこなかった。手話言語を第一言語として獲得した聾児の手話言語獲得過程を明らかにすることは彼らの指導においても有益である。しかし，手話獲得に関する研究は日本においてほとんどなされておらず，特に手話の初語が出現する前後の研究はほとんどない。また，聾児の手話獲得について比較的多くの研究がなされている米国でも，初語表出までの過程に焦点を当てた研究は数えるほどしかなく，0 歳から 1 歳にかけての聾乳児の手話獲得過程についてはほとんど明らかにされていない。

本研究は，手話言語環境にある聾児の手話言語獲得過程について，初語表出前後の乳児を縦断的に観察することにより明らかにする。

（対象と方法）

1. 対象児

初語表出以前のろうの両親を持つ聾児 2 名（A，B 児），ろうの両親を持つ聴児 2 名（C 児，D 児），聴者の両親を持つ聴児 2 名（E 児，F 児）。A 児及び B 児の聴力は，両耳とも 110 デシベル前後であった。6 人の乳児の言語的活動をおよそ月齢 5 ヶ月から 15 ヶ月まで観察し，分析の対象とした。

2. 観察方法及び分析資料

調査者が 1 ヶ月に 1 回，対象児の自宅を訪問し，約 1 時間にわたって母親と対象児の自由遊び場面における会話をビデオに収録した。ビデオ資料をもとに，対象児の手の動きを①手話単語，②意図的ジェスチャー（リーチング，指さし，シンボリックジェスチャー），③物体接触行動（操作運動，ギビング），④非指示ジェスチャー，に分類し，記述を行った。

（結果及び考察）

1. 前言語期の行動に関する分析

【研究 1：意図的ジェスチャーの量的分析】

対象児が表出した指さしやリーチングなどの意図的ジェスチャーの出現回数が，発達に伴いどのように変化するかを検討した。分析の結果，リーチングの初出月齢はどの対象児においても 7 ヶ月前後であり，それ以後のリーチング出現回数は，対象児間，月齢間で大きな違いはなかった。また，手話言語環境にある聾児及び聴児では，指さしが初出した後，その出現数は急激に増加したが，手話言語環境にない聴児では指さしの出現回数がかなり少ないことが明らかになった。

【研究 2：非指示ジェスチャーの量的分析】

伝達意図を持たない手の動きを非指示ジェスチャーと定義し，その出現時期や出現回数の発達的変化について検討した。その結果，手話言語環境にある聾児及び聴児では，7 ヶ月前後に非指示ジェスチャーが出現し始め，10 ヶ月前後をピークとして以後減少していくという傾向が確認された。これは，聴児における音声喃語の出現傾向ときわめて類似しており，非指示ジェスチャーが手話獲得における喃語の役割を果たしていることが推測された。一方，手話言語環境にない聴児においては，非指示ジェスチャーはほとんど観察されなかった。

【研究 3：意図的ジェスチャーの質的分析】

対象児が表出した意図的ジェスチャーの特徴及び発達に伴う変化について検討を行った。その結果，リーチングについては，出現当初はほしいものに対する単なる要求行動であったが，発達に伴い，物を介して人と交わる三項関係が成立し，リーチングをコミュニケーションの手段として利用するようになった。指さしについては，手話言語環境にある聾児及び聴児は，具体物に対してのみの使用から，発達に伴い使用範囲を拡大させ，その場にないものに対しても指さしを使用するようになった。また，手話言語環境にある聾児においては，「指さし＋手話単語＋指さし」というように，文末での指さしが確認され，日本手話における文末の指さしと類似した表出が出現することが明らかになった。これらのことから，手話言語環境にある乳児は，指さしを前言語行動としてだけではなく，手話言語として取り込む中で，指さしの抽象性を徐々に高め，指さしに種々の機能を負わせていることが推測された。

【研究 4：非指示ジェスチャーの質的分析】

非指示ジェスチャーの質的特徴とその質的な変化について検討した。分析の結果，第一にリズミカルな繰り返しが見られたこと，第二に，非指示ジェスチャーを構成する音韻の一つである「運動」において，発達に伴い，表出される種類が増加していったこと，第三に，非指示ジェスチャーに対して聞き手はそれほど反応していないことが明らかになった。非指示ジェスチャーのこれらの特徴は，音声喃語の特徴ときわめて類似していた。

【研究 5：聾児と聴児の発声量の比較】

聾児と聴児の発声量を比較した結果，聾児であってもかなり頻繁に発声がみられた。また，聴児では，13 ヶ月までに子音と母音が結びついた規準喃語が観察されたが，聾児 2 名は母音のみの発声が持続していた。従って，手話言語環境にある聾児は手指モダリティを，音声言語環境にある聴児は音声モダリティを喃語出現段階に自分の言語モダリティとして選び，モダリティにあった言語を獲得していることが示唆された。

2. 手話言語獲得に関する分析

【研究 6：初語として表出された手話単語の量的分析】

手話言語環境にある聾児の手話初語の出現時期と語彙数の発達的変化について検討し，以下の点を明らかにした。第一に，手話の初語出現時期は，本研究の対象児では 11 ヶ月と 13 ヶ月であり，音声言語

獲得で指摘されている初語出現時期とほぼ同じであった。第二に，手話言語の獲得過程においても，音声言語を獲得しつつある子どもと同様に，1歳3ヶ月頃に語彙の急激な増加時期があることが確認された。第三に，手話言語環境にある聾児では，7ヶ月頃に非指示ジェスチャーが観察され始め，10ヶ月頃にピークを迎え，以後減少するとともに，それに代わって手話の初語が12ヶ月前後に出現し始めるという傾向が見られた。

【研究7：非指示ジェスチャーと手話単語の発達的連続性に関する検討】

手話言語環境にある聾児が表出した非指示ジェスチャーと手話初語を比較した結果，両者の間には音韻的な連続性が確認され，非指示ジェスチャーを通して手話の音韻が獲得され，獲得された音韻レパートリーの中から最も適した音韻が選択され，手話初語として表出されている可能性が示唆された。

（まとめ）

本研究から，手話言語の獲得過程に関して以下の点が明らかになった。第一に，非指示ジェスチャーに見られる特徴は，音声喃語の特徴と多くの点で共通しており，手話獲得において喃語の役割を果たしていることが推測された。第二に，手話初語は1歳前後に出現し，音声言語の初語出現時期と同時期であった。第三に，初語成立のためには形式的な側面と意味的な側面の両方の発達が前提となるが，指さしやリーチングのような意図的ジェスチャーが意味的側面の発達を促進し，非指示ジェスチャーを通して手話言語の音韻体系の基礎が確立され，手話初語の形式的な側面が支えられていることが示唆された。

審 査 の 結 果 の 要 旨

本論文は，手話言語環境にある聾児の，初期の手話言語獲得過程について，手話言語環境にある聴児，及び手話言語環境にない聴児とを縦断的に比較することにより，明らかにしようとするものである。言語環境等の条件に応じた対象児の数や資料の質的な分析において若干不十分な点もあるが，聾幼児の長期間にわたる詳細な観察により，手話言語の基礎となる非指示ジェスチャーが聴児における音声喃語と多くの点で共通していること，手話初語の出現が音声言語の初語の出現と同時期であること，さらに，手話初語の出現における，手指動作の役割について明らかにした。また，この研究分野は先行研究がきわめて少なく，本論文の独創性は高く評価しうる。

よって，著者は博士（心身障害学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。